

## 京都府図書館等連絡協議会実務研修会（南部会場）概要

テーマ：児童サービスについて

講師：川上 博幸 氏（元 枚方市立図書館 職員）

会場：京田辺市中央図書館 2階研修室  
京田辺市田辺辻 40 番地

日時：平成 29 年 11 月 16 日（木）午後 2 時～4 時

講演 2 時 10 分～3 時 50 分

質疑応答 3 時 50 分～4 時

参加者数：32 名

概要：（冒頭に参加者の中から児童サービスを担当する人の経験年数について確認。

1～2年目の人が6人、3年以上の人が10人程度。）

（講演要旨）図書館でのおはなし、読み聞かせについては、今はいろいろ How To もの本が出ているので参考になる。

昔の図書館は今ほど来館者に親切なところではなかった。1990年代になって児童奉仕、今の児童サービスが広まったが、それまでは一般向けの資料を提供するところであり、児童向けサービスはなかった。この頃には行政や保育等の各分野でも、サービスの概念が一般化した。児童向けサービスを担当する図書館職員には、ある程度の力量が必要。基本は子どもと馴染むこと。子どもの遊び、ゲーム等に注意を向ける余裕を持ち、失敗を恐れないこと。

読み聞かせ等で子どもに接する際には、初めはゆっくり進める。周囲の状況を確認する余裕も必要で、大きい声や、暗い場所を嫌がる子どももいる。

読み聞かせするにあたっては、出来る事なら、相手を知ってから作品を選びたい。

子どもに対しては目を合わせるのが大切。目と目は心と心をつなげることである。テクニックではなく、誠実に向くことが大事。この点には子どもは敏感で、目を合わせることで、人として大事にされていることを実感する。

成人の読書は目で追うが、子どもは目と耳で情報を取り入れる。耳から得る読書体験の上に目からの読書体験を重ねている。

原始的な感情は動物にもあるが、未知への興味関心等、人間らしい感情が加わって高尚な感情になる。人間らしい感情の醸成には読書や読み聞かせが有効で、想像力を培う上で重要。

子ども時代は、3才頃までは神話的時間（鶴見俊輔）の中を生きている。

大人になった一般人にはわからない。3才を超えると人の子どもの知能は類人猿のレベルを超える。音を意識して大切に読んで、語るように読む。

読み書きが苦手な子がクラスに1人くらいはいる。ディスレクシア(学習障害)は、9才位までに対処すれば矯正できる。

（以下、細かな技術等についてレジュメにより説明）